

日米空母機動部隊を回顧

小野 靖彦

猪瀬直樹著「昭和16年の敗戦」によると、1941年4月、内閣直属の総力戦研究所に各省・日銀・大学・大企業などから平均年齢33歳の研究員を集め、模擬内閣を作り対米英戦について研究した。8月近衛内閣に報告した研究結果は、日本に勝機はなく、日米開戦は避けねばならないというものだった。東條陸相は強い関心を示し、炆炆を取る手を休めなかったという。最大の問題は石油だった。日本が仏印に進駐、米国が対日石油禁輸を発動、東條内閣は死中に活を求めて日米開戦に踏み切った。開戦後の経過は、この研究発表の通りとなった。戦後70年、日本敗戦の大きな要因となった日米空母機動部隊対決を振り返ってみたい。

1. 日米航空母艦隻数推移

日米の空母数を表1に時系列でまとめた。米海軍の増強ぶりを見ると、目障りな大日本帝国を徹底して叩くという米国の強い意志を感じる。開戦半年後、ミッドウェイで日本機動部隊は思いがけない敗北を喫し、戦いの流れが変わった。1943年4月以降 Essex 級空母が24隻就役した。そのうち戦前に発注されたのが6隻、大戦に参加したのは14隻だった。護衛空母は大西洋でドイツUボートによる商船被害に手を焼いた対策として生まれた。小型低速の空母で、貨物船や油送船を改造し、カガールで艦上機を発艦させ、輸送船団の護衛に当たった。対独参戦前の米国は39隻を英国に貸与した。その後商船の設計を利用して大量建造し太平洋に投入した。太平洋では護衛空母を航空機・兵員の輸送、上陸作戦の支援などに活用した。発艦に油圧カガールを利用した。

表1 時系列日米空母数

年月 月末	日本			米国			主な空母機動部隊 海戦
	正規	軽	護衛	正規	軽	護衛	
41/12	6	3	1	7		1	
42/06	3(+1-4)	3(+1-1)	2(+1)	5(-2)		3(+2)	珊瑚海 ミッドウェイ
42/12	4(+1)	3(+1-1)	4(+2)	4(+1-2)		12(+9)	南太平洋 第2次ソロモン
43/06	4	3	4	7(+3)	5(+5)	17(+5)	
43/12	4	5(+2)	4(+1-1)	10(+3)	9(+4)	35(+19-1)	
44/06	2(+1-3)	5	4	13(+3)	9	64(+30-1)	マリアナ沖
44/12	3(+4-3)	2(-3)	1(-3)	17(+4)	8(-1)	65(+3-2)	フィリピン沖
45/08	0(-3)	0(-2)	0(-1)	20(+3)	8	71(+8-2)	
戦後	0	0	0	30(+10)	10(+2)	80(+9)	大戦中発注分まで

- (注) ・米海軍は空母を CV (正規), CVL (軽), CVE (護衛) に分類 大西洋艦隊11隻を含む
 ・日本海軍は米海軍を参考に筆者が独断で分類
 ・太字は月末の隻数 + は新規投入 - は沈没 ただし鳳翔、龍鳳、葛城の3隻は沈没していないが燃料も艦上機もなく終戦前に空母籍を外れ係留

日本空母一覧を表 2 に示す。合計 25 隻。内訳は未成戦艦・未成大型客船改造を含め正規空母 13 隻、艦艇改造を含め軽空母 7 隻、客船改造護衛空母 5 隻。正規空母のうち信濃は基準排水量では当時世界最大であり、飛行甲板装甲など防御に力点を置いたが、呉に回航中米潜水艦の魚雷 6 発を受け沈没した。天城と葛城は艦上機も燃料もなく、出撃の機会はなかった。

表 2 日本空母

艦名	基準排水量 トン	主機 shp	最大速 ノット	艦上機	飛行甲板 L×B m	竣工	退役 沈没	備考
鳳翔 軽	7,470	30,000	25.0	15+6	158.2x22.7	22/12 横	45/6 特殊警備艦	日本初の空母 主に訓練用
赤城 正	36,500	133,000	31.2	66+25	249x30.5	38/03 呉	42/6 ミッドウェイ 航	未成巡洋戦艦改造
加賀 正	38,200	127,400	28.3	72+18	248x30.5	35/03 横	42/6 ミッドウェイ 航	未成戦艦改造
龍驤 軽	10,600	66,000	29.0	36+12	156.5x23.0	33/05 横	42/8 ヲロロン 航	小型
蒼龍 正	15,900	152,000	34.5	57+16	216.9x26.0	37/12 呉	42/6 ミッドウェイ 航	ロンドン条約制限下
飛龍 正	17,300	153,000	34.6	57+16	216.9x27.0	39/07 横	42/6 ミッドウェイ 航	ロンドン条約制限下
龍鳳 軽	13,300	52,000	26.5	24+7	185.0x23.0	42/11 横	45/6 特殊警備艦	潜水母艦大鯨改造
祥鳳 軽	11,200	52,000	28.0	28	180.0x23.0	42/01 横	42/5 珊瑚海 航	潜水母艦剣崎改造
瑞鳳 軽	11,200	52,000	28.0	28	180.0x23.0	40/12 横	44/10 比島沖 航	潜水母艦高崎改造
千歳 軽	11,190	56,800	29.0	24+4	180.0x23.0	43/12 佐	44/10 比島沖 航	水上機母艦改造
千代田 軽	11,190	56,800	29.0	24+4	180.0x23.0	43/12 横	44/10 比島沖 航	水上機母艦改造
翔鶴 正	25,675	160,000	34.2	72+12	242.2x29.0	41/08 横	44/6 マリア沖 潜	軍縮条約廃止後
瑞鶴 正	25,675	160,000	34.2	72+12	242.2x29.0	41/09 神	44/10 比島沖 航	軍縮条約廃止後
飛鷹 正	24,140	56,250	25.5	48+5	210.3x27.3	42/07 神	44/6 マリア沖 航	未成大型客船出雲丸改造
隼鷹 正	24,100	56,250	25.5	48+5	210.3x27.3	42/05 長	45/6 特殊警備艦	未成大型客船檀原丸改造
大鷹 護	15,600	25,200	21.1	23+4	172.0x23.5	41/09 佐	44/8 トラ西岸 潜	客船春日丸改造
雲鷹 護	14,500	25,200	21.4	26+4	172.0x23.5	42/05 呉	44/9 東沙島沖 潜	客船八幡丸改造
沖鷹 護	14,500	25,200	21.4	26+4	172.0x23.5	42/11 呉	43/12 八丈島沖 潜	客船新田丸改造
神鷹 護	17,500	26,000	21.4	27+6	180.0x24.5	42/11 呉	44/11 濟州島西 潜	独客船改造
海鷹 護	13,600	52,000	23.0	24	160.0x23.0	43/11 長	45/7 別府湾 航	アムステルダム丸改造
信濃 正	64,800	150,000	27.0	42+5	256.0x40.0	44/11 横	44/11 潮岬東南 潜	未成戦艦改造 重防御
大鳳 正	29,300	160,000	33.3	61+1	257.5x30.0	44/03 神	44/6 マリア沖 潜	飛行甲板重防御
雲龍 正	17,150	152,000	34.0	57+8	216.9x27.0	44/08 横	44/12 宮古島沖 潜	輸送のみ
天城 正	17,460	152,000	34.0	57+7	216.9x27.0	44/08 長	45/7 呉沈没 航	出撃せず
葛城 正	17,260	104,000	32.0	57*7	216.9x27.0	44/10 呉	45/7 特殊警備艦	出撃せず

(注) 竣工欄 横須賀,呉,佐世保海軍工廠,三菱長崎,川崎神戸を略記

米空母は型式・級別に表 3 に要約した。開戦当初は量的にやや劣勢だったが、1943 年半ばから Essex 級などが続々と投入され、艦上機性能と量、暗号解読、レーダー性能、航空管制、対空防御、ダメージコントロールなど総合力で次第に日本を圧倒した。

表3 米国空母 戦前あるいは大戦中に発注されたもの

型式	級	基準排水量 LT	Loa m	Bex m	Vmax knot	艦上機	備考
CV	Lexington 2隻	36,000	270	32.8	33.2	78	竣工：27/11,12 Lexington 珊瑚海で沈没 Saratoga 潜水艦雷撃や特攻で大破したが克服
	Ranger 1隻	14,500	234	33	29.3	76	34/6 竣工 大西洋艦隊
	Yorktown 3隻	19,800	251	33.3	32.5	90	竣工：37/9～41/10 Yorktown はミッドウェイ、Hornet は南太平洋で沈没
	Wasp 1隻	14,700	225	33	29.5	100	40/4 竣工 42/9 潜水艦の雷撃で火災自沈
	Essex 24隻	27,100	270	45	32.7	100	42/12～50/9 竣工 14隻は大戦に参加 うち3隻は特攻などで大破したが沈没は免れた
CVB	Midway 3隻	45,000	296	36.9	33	137	45/9,10 竣工
CVL	Independence 9隻	10,600	190	33.3	31	30	43/1～43/1 竣工 建造中の巡洋艦を改造 レイ沖で1隻沈没
	Saipan 2隻	14,500	208	35	33	50	重巡船体利用 大戦後竣工
CVE	LongIsland 1隻	7,800	150	31	16.5	16	41/6 竣工 貨物船改装 CVE1号 主に養成訓練
	Charger 1隻	8,000	150	33.8	17	30	42/3 竣工 貨物船改装 1隻 養成訓練
	Bogue 11隻	7,800	151	34	18	24	42/9～43/4 竣工 建造中のC3型貨物船改装 6隻 は太平洋で航空機・兵員輸送 5隻は大西洋 1隻沈没
	Sangamon 4隻	11,400	169	35.8	18	25	42/8,9 竣工 T2型油送船改装 大西洋 太平洋
	Casablanca 50隻	7,800	156	32.9	20	28	43/7～44/7 竣工 貨物船設計を利用 太平洋の航空機・ 兵員輸送 上陸支援が主 大西洋は7～4隻 5隻沈没
	Commencement Bay 19隻	10,900	170	32	19	34	44/11～46/2 竣工 T3油送船設計を利用 大戦参加は4 隻 沖縄空爆など

2. 日米艦上機比較

機動部隊では攻撃と護衛の主役は艦上機である。日本の艦上戦闘機は零式（ゼロ）で始まり、零式で終わった。ここに記載する A6M5 型は防弾、武装を改良し、機関出力を向上させ 1943 年後半から三菱重工と中島飛行機で量産された機種である。日米艦上機の代表的機種について仕様と生産数を表 4 に示す。ミッドウェイ海戦当時は、零式二一型、艦爆九九式、艦攻九七式だった。最大攻撃距離は 250 哩とされた。零戦は軽量で運動性が抜群、機銃の威力も大だが携行弾数が少なかった。大戦後半に米軍が投入した Hellcat は、自重も馬力も零戦の約 2 倍、頑丈で装甲が手厚く操縦しやすかったという。

表には記載していないが、日本の艦上攻撃機には九七式と天山（後継機）がある。米国では Devastator がミッドウェイ海戦を境に第一線を退き、以後は後継の Avenger が活躍した。

表4 日米主力艦上機 仕様比較

任務	戦 闘 機			爆 撃 機			
	零式	Wildcat	Hellcat	九九式	彗星	Dauntless	Helldiver
名称	零式	Wildcat	Hellcat	九九式	彗星	Dauntless	Helldiver
代表型式	A6M5	F4F-4	F6F-5	D3A2	D4Y1	SBD-5	SB2C-4
全長 m	9.121	8.8	10.24	10.231	10.22	10.08	11.18
全幅 m	11.0	11.6	13.06	14.36	11.50	12.65	15.17
全高 m	3.57	2.8	4.11	3.348	3.175	4.14	4.01
自重 kg	1,856	2,674	4,190	2,750	2,510	2,905	4,794
Vmax km/h	565	515	621	427	546	410	475
航続距離 km	2,560+30分	1,337	2,460	1,050	1,783	1795	1,876
機銃 mm	2×20 他	6x12.7	6x12.7	3x7.7	3x7.7	2x12.7 他	2×20 他
爆弾 kg	120	90	1,800	250	500	550	900
機関出力 hp	1,130	1,200	2,200	1,300	1,200	1,200	1,900
乗員	1	1	1	2	2	2	2
運用開始	1940	1940	1943	1939	1943	1942	1943
生産数	10,430	7,885	12,275	1,512	2,253	5,936	7,140

・デ - タは Wikipedia 他から入手した。米機は英語版による。運用開始は初期型式投入、生産数は初期型式・改良型式の累計で陸上機も含む。速度や航続距離は前提条件により変動する。

3 . 珊瑚海海戦 1942 年 5 月 7,8 日

珊瑚海（豪州の北東）で日本と米豪連合軍機動部隊により、史上初の空母対空母の海戦があった。7 日、日本軍は索敵誤報により出撃したが空母を発見できず、米軍も誤報により出撃、たまたま別働隊の軽空母祥鳳を発見し沈めた。日本は薄暮攻撃にも失敗し、夜間帰艦できたのは僅かだった。艦爆の一部が米空母を自軍と誤認、米側は米機と誤認し、あわや着艦しかけるといっソドがあった。

8 日、日米共に索敵に成功し、攻撃隊を発進させ、途中すれ違ったという。両日合わせて日本側は軽空母「祥鳳」沈没、正規空母「翔鶴」の飛行甲板が使用不能、艦載機 81 機喪失。米側は正規空母「Lexington」沈没、艦載機 66 機喪失。日本はホートルズ-攻略を断念し、米軍は正規空母を失った。

4 . ミッドウ-海戦 1942 年 6 月 5、6 日

ミッドウ-（ハワイの西 2 千 km、日本の東 4 千 km）で、日本と米国の空母機動部隊が戦った。艦艇全体では日本が圧倒的だったが、最前線では、日本は正規空母 4 隻、米国は正規空母 3 隻 + 陸上基地と勢力は互角。海戦の結果は米国の圧勝となり、日本のミッドウ-攻略作戦は失敗した。日本は正規空母「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」他沈没、艦載機損失 247 機、戦死 3,057 名。米国は正規空母「Yorktown」他沈没、艦載機損失 80 機。戦死 362 名。

空母の泣き所は、航空機燃料と弾薬を大量に積んでいること。誘爆すると致命傷となる。特に攻撃隊が飛行甲板と格納庫で待機しているときが最悪。日本空母 3 隻はこのタイミングで急降下爆撃

され万事休した。勝利の女神が米軍にほほえみ、戦争の流れが変わった。

ミッドウェイ海戦については日米に多数の著作がある。文献は臨場感があり、国内外でベストセラーとなった。淵田中佐は空母「赤城」の飛行隊長として、ハワイ攻撃飛行隊総指揮官を務めたが、ミッドウェイ海戦では、手術直後で「赤城」艦上で観戦するのが精一杯だった。赤城が沈没し、負傷した淵田は横須賀海軍病院に後送された。退院後一時後方勤務になり、ミッドウェイ海戦の研究に従事、その記録を戦後発見したと言う。連合艦隊航空参謀（海軍大佐）として終戦を迎えた。

文献は米国の作家が多く、多くの文献と400名近い海戦参加者の証言をもとに、将兵個人にも光を当てて、この海戦をドキュメンタリーに仕上げたものである。

文献で澤地久枝は、ミッドウェイ海戦に於ける日米の戦死者を追跡調査し、日本側3,052名、米側362名の略歴を含む名簿を作成し、分析し、家族の声、戦時中に作成された「戦闘詳報」などを論じている。

日米の記録により当日のミッドウェイ海戦の経過を抜粋してみた。

1942年6月5日（日時は日本時間 現地は - 21時間 **青色は日本側 赤色は米側**）

0130 ミッドウェイ攻撃隊 108機(艦戦36 艦爆36 艦攻36) 発進 偵察機7機、上空警戒戦11機発進

0232 ミッドウェイ基地飛行艇が南雲部隊に接触開始

0300 ミッドウェイ基地隊 84機(海兵戦30 陸爆21 海兵爆27 海攻6) 発進

0316 日本攻撃隊が基地隊機と遭遇 米戦15機撃墜が大破に

0334-0410 ミッドウェイ爆撃 0400 友永隊長第二次攻撃の要ありと報告 地上に航空機なし 4機失う

0405-0540 ミッドウェイ基地隊 52機(陸爆21 海兵爆27 海攻4)南雲部隊を攻撃 21機失う 命中弾なし

0408 「Enterprise」「Hornet」117機(戦20 爆68 艦攻29) 発進

0415 南雲長官米空母不在と判断 ミッドウェイ第二次攻撃を決意 兵装転換(艦攻魚雷 爆弾)を下令

0428 利根4号機 米水上艦10隻発見と報告

0445 南雲長官 米空母を含む水上部隊存在と判断 艦攻の兵装再転換(爆弾 魚雷)下令

0520 利根偵察機より「敵ハ其ノ後方ニ空母ヲ見テ1隻ヲ伴フ」と打電

0530 「Yorktown」35機(艦戦6 艦爆17 艦攻12) 発進

0540-0618 ミッドウェイ攻撃隊収容

0618-0712 米空母艦攻41機 南雲部隊を攻撃 35機失う 命中なし

0723-0730 米空母艦爆50機 南雲部隊を攻撃「加賀」4発、「蒼龍」3発、「赤城」2発命中 大火災 「飛龍」だけが攻撃を免れた

0758 「飛龍」第一次攻撃隊 24機(艦戦6 艦爆18) 発進

0910 「飛龍」第一次攻撃隊 「Yorktown」攻撃 3発命中 火災発生 18機失う

1031 「飛龍」第二次攻撃隊 16機(艦戦6 艦攻10)発進 第一次攻撃隊収容

1045 「飛龍」第二次攻撃隊 「Yorktown」に魚雷2発命中 傾斜漂流 7機失う

1245 「飛龍」第二次攻撃隊収容

1403 「Enterprise」24機(爆)「飛龍」に4弾命中 3機失う

1615 「蒼龍」沈没 1626 「加賀」沈没

1942年6月6日

0200-0210 「赤城」「飛龍」沈没

0201 日本潜水艦の雷撃により「Yorktown」沈没

米基地攻撃隊は戦闘機を伴わず日本空母を波状攻撃し、零戦の直掩により多数が撃墜され、空母の回避運動もあり、命中弾はなかった。続く米艦上機による雷撃も大半が撃墜され失敗に終わったが、最後の急降下爆撃が南雲部隊のすきを突き、大戦果となった。

淵田はあと5分あれば米空母への攻撃隊が発進できたとして「運命の5分間」と記述した。文献では「運命の5分間」は上空警戒機1機の出発を見誤ったものであり、南雲長官の意図通り護衛戦闘機を伴った有力な攻撃隊を発進させるには、あと1時間は必要だったと見ている。南雲が0445に兵装再転換を下令したという戦闘詳報の記録に澤地が異論を述べ、海軍OBが反発するという一幕があったようだ。

日本海軍は練度の高い搭乗員と優れた零式戦闘機を擁していたが、艦爆と艦攻の攻撃力を発揮する前に「赤城」「加賀」「蒼龍」が炎上した。残る「飛龍」が反撃し、「Yorktown」を大破し、最後は潜水艦の雷撃により止めをさしたが、「飛龍」も米軍の攻撃により沈没した。

後知恵ではあるが、米軍は暗号解読により連合艦隊の意図と戦力を概略把握し、ミッドウェイ基地防備を強化したこと、持てる空母を総動員して機動部隊をミッドウェイ付近に配置したこと、レーダーによる早期警戒が可能だったことなどの優位性を活かし、幸運にも恵まれた。連合艦隊は色々手を尽くしたにもかかわらず、米機動部隊の消息は不明だった。米空母不在という思い込みが強く、二段索敵をしなかった。

これも後知恵だが、帝国海軍のインテリジェンスは米海軍あるいは帝国陸軍のそれには及ばなかったとされている。後方の連合艦隊旗艦「大和」では無線諜報によりハワイ方面の活発な動きから米機動部隊が出撃したらしいと察知したが、無線封止を重視し、「赤城」には伝えなかった。

南雲部隊は基地機と艦上機の長い攻撃を直掩戦闘機の活躍と艦の回避運動で排除しつつ、その合間に基地攻撃隊収容や戦闘機への弾薬補給などを行った。狭い格納庫内では右に左に揺れながら、魚雷から爆弾へ、また魚雷へと兵装転換するあわただしさは想像を超えた事態だったろう。艦爆と艦攻を護衛すべき戦闘機は防空に追われていた。戦闘機の護衛付きで艦爆や艦攻の大兵力を発進し、敵に大打撃を与えるという南雲司令長官の決断は、最悪の結果に終わった。

5．第二次ソロモン海戦 1942年8月21日

ソロモン諸島北方で日米の機動部隊が戦った。日本は陸海からガダルカナルの飛行場奪還を目指したが、軽空母龍驤、駆逐艦1隻、艦上機25機を失い、作戦は失敗した。米国は空母1隻中破、艦上機9機の損失にとどまり、飛行場も守った。

6．南太平洋海戦 1942年10月26日

カカウルズ諸島付近で日米が戦った。日本は艦上機92機損失、米国は正規空母1隻沈没、艦載機74機損失。日本による米豪遮断作戦自体は失敗に終わった。日本は航空機搭乗員148名を失い、下り坂をたどることとなる。米側は搭乗員39名の損失に止まった。

7．マリアナ沖海戦 1944年6月19,20日

米がサイパン島に上陸した直後に、同島の西方で日米機動部隊が戦った。結果は質量ともに勝る米軍が圧勝した。先制攻撃に向かった攻撃機はレーダーで位置と高度を捕捉され、新型F6F戦闘機450機が上空から襲い、後にマリアナの七面鳥撃ちと言われる悲劇となった。日本の正規空母2隻は米潜

水艦の雷撃により沈没した。日本海軍は総力を挙げて戦ったが破れ、米軍がマリア諸島を制し、B29による日本本土空爆への道を開いた。7月、東條内閣総辞職。

	日本		米国	
	戦力	損失	戦力	損失
空母	9	3	15	0
戦艦	5	0	7	0
重巡洋艦	11	0	8	0
軽巡洋艦	2	0	12	0
駆逐艦	20	0	67	0
潜水艦		8		
艦上機		395		130

8. エンガノ岬沖海戦（フィリピン沖海戦の一部） 1944年10月24,25日

南方からの資源輸送にはフィリピン周辺の制空権が不可欠だった。日本海軍は残り少ない空母機動部隊を囷として米艦隊を北に誘い出し、そのすきにレイ島の米地上軍を水上艦で攻撃するという奇策に出たが失敗に終わった。小澤艦隊は120機弱の艦上機半数を攻撃に使い、残りを陸上に退避させ、10数機の艦戦で延べ約500機の攻撃を受けた。フィリピン沖海戦全体では日本艦艇66隻、米国艦艇214隻が戦っているが説明は省略する。神風特別攻撃隊出動。

	日本		米国	
	戦力	損失	戦力	損失
空母	4	4	11	0
戦艦	2	0	6	0
重巡洋艦			2	0
軽巡洋艦	3	1	7	0
駆逐艦	8	2	44	0
潜水艦		不明		不明

9. 川崎重工業が関係した空母

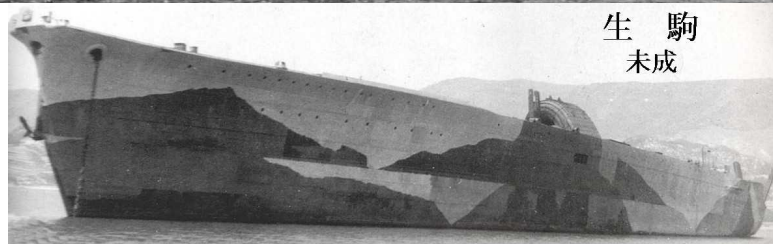
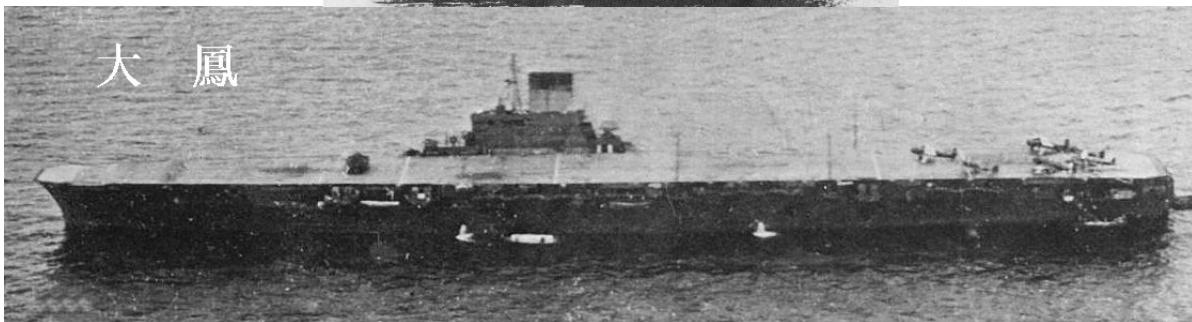
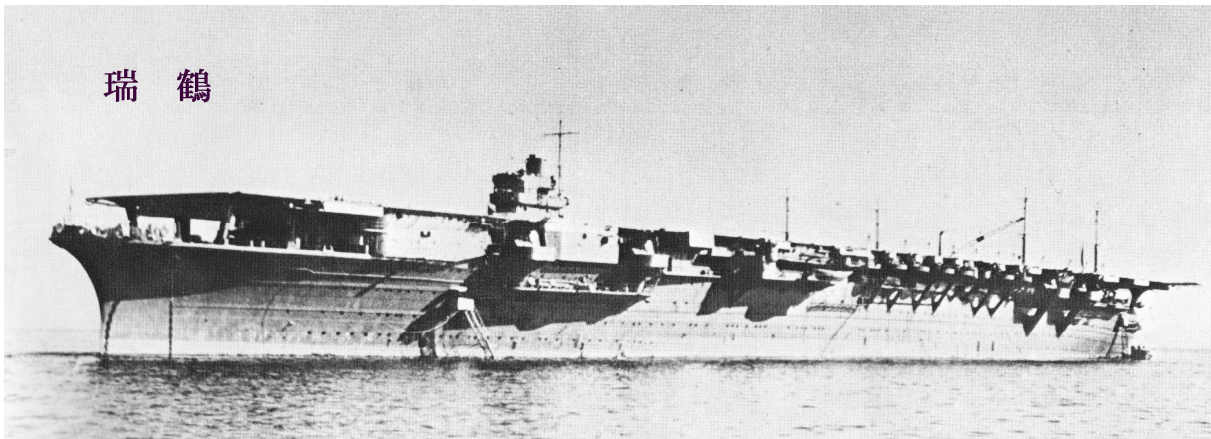
「加賀」は川崎造船所で戦艦として進水したものの、軍縮条約で工事中止となり、後に横須賀海軍工廠で正規空母に改装された。

「瑞鶴」は川崎重工で建造し、1941年9月に竣工した。海軍は軍縮条約失効後、戦艦「大和」「武蔵」、空母「翔鶴」「瑞鶴」他の建造を計画した。機械室4区画、缶室8区画、16万SHP、軸数4、速力34ノットを誇った。進水要件によると、進水重量は1万8千t。「盤木支柱の荷重著しく大取に非常に困難を生ず、予定時間を遙かに超過し、作業員の疲労も極に達す」とある。進水直後に米松・樅材が千本以上流出し、芦屋から甲子園浜の各地に漂着し、回収に苦労したという。「瑞鶴」は、川重小史「九十年の歩み」によれば「太平洋戦争中大活躍した主力空母で、華々しい戦歴を残した。昭和16年12月、真珠湾の緒戦から珊瑚海、ソロモン、マリア、南太平洋の各海戦に転戦。最後は小沢艦隊の旗艦として比島沖に出撃中、敵機の大編隊に襲われ、昭和19年10月25日、ついに撃沈された。」

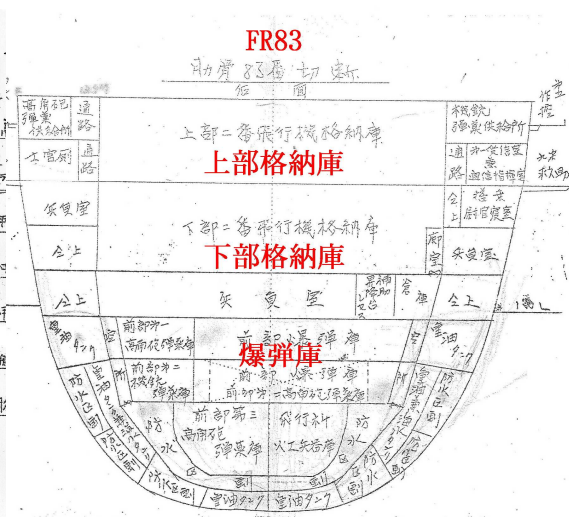
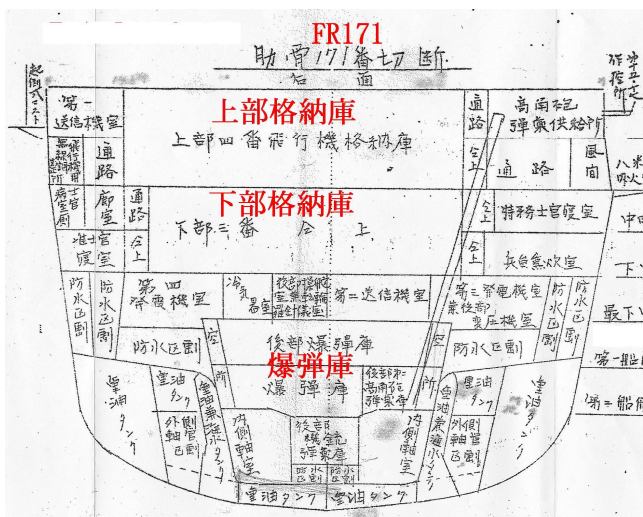
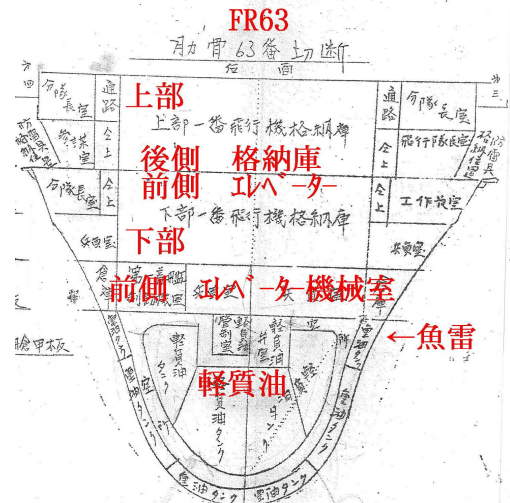
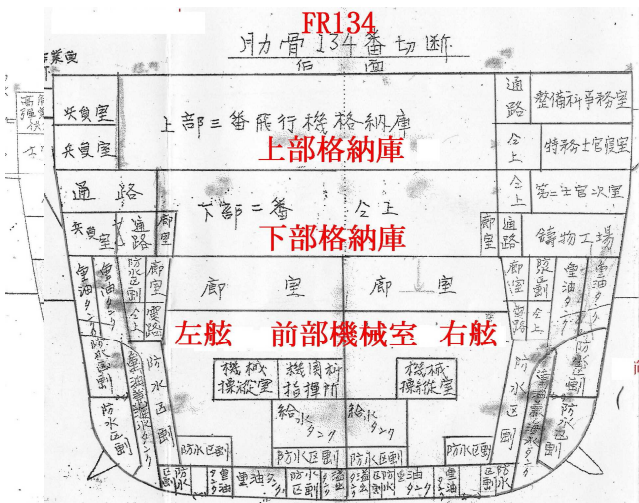
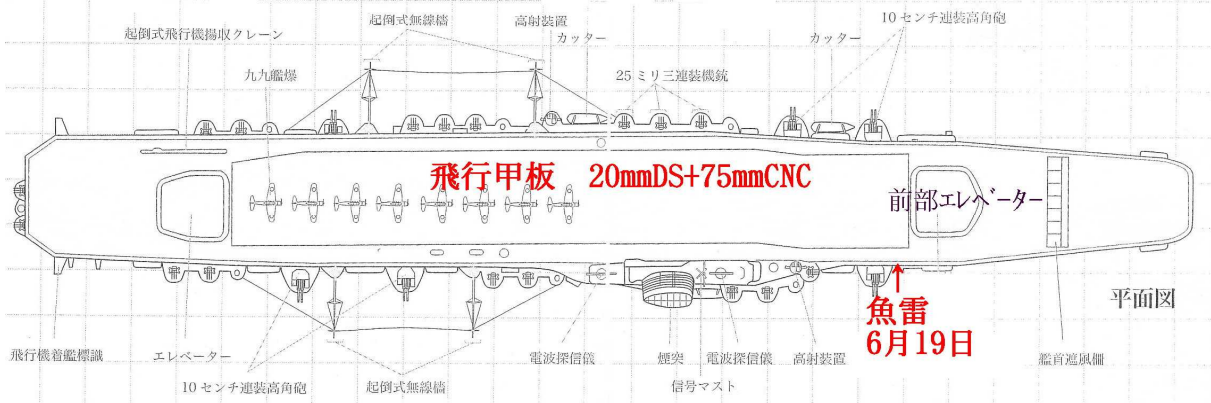
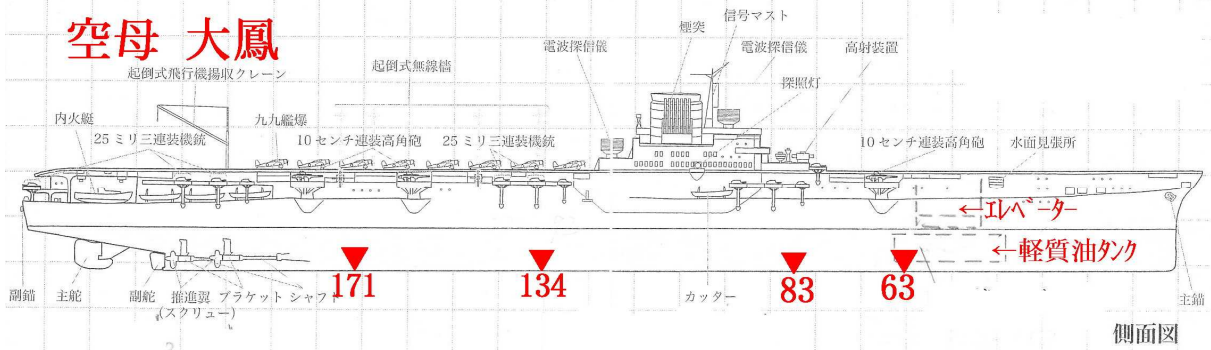
「飛鷹」は建造中の豪華客船「出雲丸」を空母に改装したもので、1942年7月に竣工した。マリアナ沖海戦で雷撃機に襲われ軽質油が引火爆発、応急弾薬庫も誘爆し沈没した。

「大鳳」は1944年3月に竣工した。ミッドウェイでの経験を活かし前後甲板間に75ミリの装甲を施し、500kg爆弾の直撃に耐えるようにした。川重船舶海洋・技術本部に簡単な管理図があり、当時の空母艦内配置をうかがうことができる。軽質油タンク・弾薬庫は外板から重油タンクや空所で3重に守られる。初陣のマリアナ沖海戦で、潜水艦の放った魚雷のうち1本が右舷前部甲板付近に命中、甲板が停止、下部に軽質油タンクがあり、損傷により洩れたガソリンが気化して格納庫に充満した。4時間後に大爆発・炎上し、8時間後に沈没した。

「生駒」(雲龍型6番艦)は進捗率60%で工事中止となり、小豆島で迷彩のまま終戦を迎えた。



空母 大鳳



10. 結び

1941年12月開戦後、日本は連戦連勝で版図を拡大した。しかし日本は1942年6月のミッドウェイ海戦に敗れ、8月にはガダルカナル島に完成した直後の滑走路を奪われた。その奪還を支援する数次の海戦は日米互角だったが、陸軍への武器・食糧輸送は困難を極めた。半年に及ぶ激戦の後、1943年2月に1万名が辛くもガダルカナルから撤退した。戦死者2万人のうち2/3が餓死・戦病死だったとされる。

以後、マーシャル諸島など西太平洋の島々では日本軍の基地を機動部隊が空襲し、艦艇が艦砲射撃し、海兵隊が上陸占領した。飛び石作戦と言われる。バールとトラックは空襲で無力化された。日本本土爆撃の拠点となるリアン諸島を守るため連合艦隊は総力を挙げたが、空母3隻、多数の艦上機、搭乗員を失った。フィリピン沖では奇策も通じず、空母機動部隊は壊滅した。

参考文献には日米司令長官、参謀長に関する賛辞や批判が目につく。ミッドウェイ海戦当時の草鹿参謀長、源田作戦参謀、吉岡航空参謀は、戦後この海戦について、米空母はいないと思い込んでいたこと、哨戒機の誤報から米空母までの距離は遠く、足の短い艦戦なしの攻撃なら直掩機で防御できると思ったこと、逆に艦戦を付けなくて艦爆攻撃隊だけを発進させる決心がつかなかったこと、大兵力が整うのを待つ方が有利と考えたことなどを回想している。歴史にifはないが、米空母の存在に賭け、二段索敵をしていたらどうなただろう。日本もまた0400ごろ艦戦を伴う100機余りの攻撃隊を発進させたかもしれない。南雲部隊は直掩機が少なくなり、その代わり格納庫に弾薬や燃料は少ない。痛み分けに終わったのだろうか。神様に見放されたと言うべきか。

参考文献

- ミッドウェイ 淵田美津雄、奥宮正武 朝日ソノタマ 1992 (初版 1951)
- ミッドの太平洋海戦史 C.W.Nimitz E.B.Potte 訳 実松讓 富永謙吾 恒文社 1962
- 逆転 Walter Lord 翻訳 実松讓 1969 ぶんか社
- ミッドウェイ海戦 防衛庁防衛研究所戦史室 朝雲新聞社 1971
- 世界の艦船 日本軍監志昭和編 海人社 1978
- World War 日本海軍機写真集 177-187 1985
- 帝国海軍連合艦隊 その栄光と最期 リチャード・ハブブル サカイ出版 1985
- 記録 ミッドウェイ海戦 澤地久枝 文藝春秋 1986
- 真実の太平洋戦 奥宮正武 PHP 文庫 1988
- 零戦燃ゆ 柳田邦男 2 文春文庫 文藝春秋 1993/6
- 連合艦隊 軍艦ハットブック 雑誌「丸」編集部 光人社 2004
- 日本軍のインテリジェンス 小谷賢 講談社 2007
- 日本海軍空母 vs 米海軍空母 Mark Stille 大日本絵画社 2008
- 帝国海軍空母大全 菊池征男 学研 2009
- ミッドウェイ海戦 その時、艦隊はどう動いたか 左近允 尚敏 新人物往来社 2011
- ドキュメント 太平洋戦争全史 上下 亀井宏 講談社 2013
- 昭和天皇 第六部 聖断 福田和也 文春文庫 2015